

た。また20日の日中には、ウンカの飛来が肉眼で観察され、空中ではウンカを捕獲するツバメの活発な活動を認めた。

ネットトラップと並行して実施している気象観測の結果では、兩種ウンカの飛来はほとんどの場合、前線の通過ともなっており、W-Sの風が主体で、降雨をみる場合が多かった。

おわりに

このネットトラップ調査はまだ1ヵ年だけの調査結果

であり、今後年次変動など明らかにする必要があるが、当初予想していた以上に初期飛来の把握ができ、6月末～7月にかけての主要な飛来動向が予察灯よりほ場の実態とよく適合していることが分かった。

大口市や、出水市での飛来が少なく、またトビイロウンカがセジロウンカに比べて不活発であったなどの問題点はあるが、兩種ウンカの飛来消長を把握するための新しい調査方法と考えられるので、今後さらに積極的に活用して行きたいと考えている。

最近の稲しまはがれ病保毒虫率の動向

岸 本 良 一 (九州農業試験場)

Recent trend of percentage of infective planthopper, *Laodelphax striatellus* (Fallén), transmitting the rice stripe virus, in Kyushu.

Ryoiti KISIMOTO (Kyushu Agricultural Experiment Station, MAF)

Surveys on percentages of infective planthopper have been continued since 1967 by the hemagglutination test, with parallel surveys on prevalence of planthopper by yellow pan water traps. The percentages at the first generation, immigrants into paddy fields, were rather high, exceeding 5% until 1969. In 1969, density of planthopper showed remarkable decrease due to unknown factors, which caused little occurrence of the rice stripe virus disease. Consequently, the percentage in the overwintering generation of 1969 to 1970 decreased clearly and it is still keeping a low level.

It is important to follow whether or not the percentage shows any sign of increase due to change of agricultural economy, i. e., increase of fallow fields.

福岡、佐賀、熊本各県を中心に、各地のヒメトビウンカの稲しまはがれ病保毒虫率を、抗体感作赤血球凝集反応を用いて調査を続けているが、1967年以降、保毒虫率、ウンカの発生数ともに減少の一途をたどっており、現状では殆んど問題はなくなったと考えられる。その経過を、保毒虫率、しまはがれ病発生程度で示すと表のとおりである。また、黄色水盤法によるヒメトビウンカの発生傾向を、5月20日植の早植本田での結果を代表とし

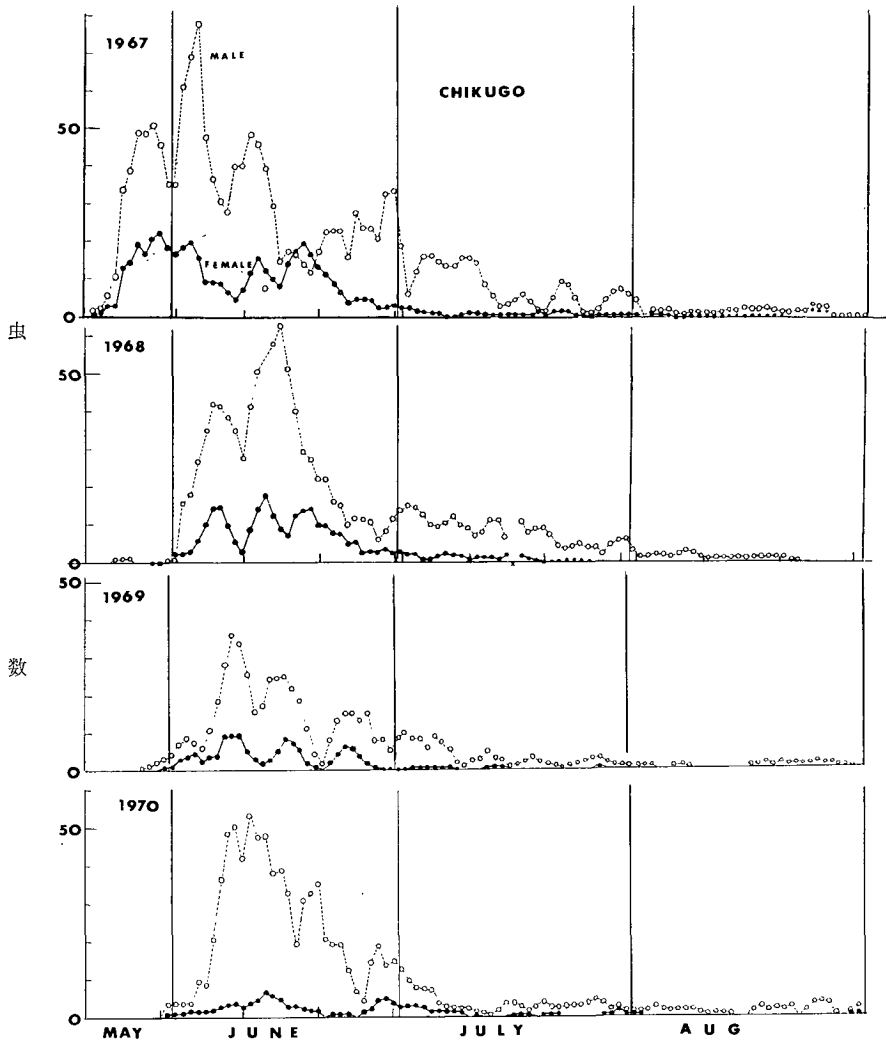
て示したのが図のとおりである。

九州農試場内での調査では、1968～9年の越冬世代までは、大体5%以上で、有意な保毒虫率を示し、早植、たとえば、5月20日ないし6月10日植付の本田では、相当な発病株率に達していたが、1969年、ウンカの発生量が顕著に減少し、早植本田でも殆んど発病が見られなかったことから、1969～70年の越冬世代には保毒虫率は急に低下した。

ヒメトビウンカの稲しまはがれ病保毒虫率の年次変化

| 年次 | 世 代 | 九州農試場内保毒虫率 | 発 病 程 度 (株 率) | | | 福岡、佐賀県下保毒虫率 (調査地点数) |
|------|--------|------------|---------------|--------|-------|------------------------|
| | | | 20/V植 | 10/VI植 | 一般圃場* | |
| 1967 | 第2回成虫期 | 7.36 | 90.0 | 25.7 | 9.9 | 6.07(4) |
| | 越冬世代 | 5.88 | | | | 13.30(3) |
| 1968 | 第2回成虫期 | 5.37 | 61.3 | 12.0 | 7.1 | 4.61(84) |
| | 越冬世代 | 5.27 | | | | 7.62(37) |
| 1969 | 第2回成虫期 | 4.16 | 10.0 | 0 | 2.2 | 5.79(50) |
| | 越冬世代 | 1.41 | | | | 4.73(14) |
| 1970 | 第2回成虫期 | 1.82 | 6.3 | 4.0 | 0.29 | 2.28(21) |
| | 越冬世代 | 1.10 | | | | 1.89(16) |

* 一般農家圃場3ヵ所についての調査



黄色水盤法によるヒメトビウンカの発生消長（3点移動平均）

福岡、佐賀両県下での調査でもこの傾向は見られ、大体2%前後まで下っている。しかし、山間、山麓地帯で、以前から発生の多かった地点、たとえば、飯塚市、北九州市小倉区、行橋市、八女郡黒木町などでは、やや高い所もあった。広い平坦部では一般に非常に低くなっている。

ヒメトビウンカの発生の傾向は、1967年以降、発生時期のおくれが目立ち、1970年には5月下旬の発生は殆んどみられず、6月中旬にピークが見られるようになっていいる。発生量も黄色水盤法による雌の捕殺数（これがほ場の実態に近い）で示すと約1/3、予察灯の結果では1/6～

1/8に減少している。この原因は分っていない。

このように減少したヒメトビウンカ、稲しまはがれ病が、再び増加するおそれがあるかどうか重要であるが、とくに休耕田の増加は、越冬世代虫の増加にとって有利に作用し、防除意欲の減退と共に、今後注目しなければならない点と考えられる。しかし、保毒率が今のように非常に低い場合、ヒメトビウンカの密度が増加しても急激な発病の増加はおこらないであろう。保毒率に増加のきざしが見えるかどうか、しばらく調査を続ける必要がある。